実践研究
私の保育ノートから

子どもとミュージカル

榊原友里

私は大学学部三年生の春に愛育養護学校に出会いました。それから二年間、実習生として週に一回愛育養護学校に通い、二〇〇九年から現在に至るまでは非常勤講師として子どもたちと過ごしています。愛育養護学校とは、東京都心に位置する、幼稚部と小学部からなる私立の特別支援学校です。

初めの実習の一年間を通して、私はこの学校の子どもたちの感性の豊かさに何度も驚かされました。誰かが何か楽器を鳴らせば、そこに誰かがのって楽器を鳴らし、身体を動かし、次々と子どもが集まってきて、お祭りのような場ができる。そこに絵の具があれば、画用紙に思いのままに色をちりばめたり、水に絵の具が溶けるさまをじっと見つめる。そこには保育者の支えもあるのですが、私は、自分の心の動きをすっと表現へと変えられる子どもたちをうらやましく思ったりもしました。

子どもの遊びとミュージカル

ある日、こんなことがありました。その日は月に一回学校に来る、音楽のアートティーチャーがみえている日でした。当時年長さんだったAちゃんと私は、アートティーチャーがピアノを奏でる中、歌ったり踊ったりして遊んでいました。Aちゃんは音楽

がとても好きな女の子です。そのうちアートティーチャーはディズニー映画の曲を弾くようになりました。するとAちゃんは「この曲、何？」と聞き、「『三匹のこぶた』だよ」と言われれば、自分はこぶた、私を狼（おおかみ）として「三匹のこぶた」ごっこを展開するというように、音楽に合わせてごっこ遊びをするようになりました。それはとても楽しい時間でした。

その時、私は自分の幼い日を思い出しました。私はAちゃんと同じく音楽が好きで、歌ったり踊ったりすることが大好きな子どもでした。また、母の舞台好きの影響で、小さいころからミュージカル等の舞台を観に連れていってもらっては、家に帰って自作自演のミュージカルを上演していました。Aちゃんとの遊びから、私はそんな幼い日の楽しい時間を思い出したのです。そしてそのまま大きくなった私は、大学ではミュージカルサークルに入り、現在に至るまで歌ったり踊ったり演じたりということを自己表現の一つとしてきました。

私はAちゃんと遊んでいて、私が表現活動の中で特にミュージカルを好むのは、きっと子どものころに胸を弾ませた遊びに一番近いからなのではないかと思いました。ミュージカルは演劇の一種で、演劇、音楽、舞踊、美術、文学などの文化が一体となった総合芸術と呼ばれるものです。それは、歌いながら踊り、すっと自分以外の何かになることができる子どもにとても近い表現形式であると私は思いました。

そこから私は、「この学校の子どもたちにミュージカルを出会わせてみたい」と考えるようになりました。そこで学校側に提案し、職員の皆さんと相談を重ねて、ミュージカルを実践することになりました。二〇〇九年の九月に一回上演し、その反省を踏まえて、二〇一〇年九月には学校の授業の一つとしてこのミュージカルを実践するに至りました。

ミュージカル実現に向けて

私はミュージカルの構想を考える際、せっかくミ

ュージカルに出会うのなら、子どもたちに「観る」だけではなくて、「体験」してみてほしいと考え、「観客参加型ミュージカル」という形をとることにしました。それは、「観ていること」も「自分もキャストと一緒に動くこと」もでき、一人ひとりの子どものあり方が尊重できるミュージカルの形です。

そして、「できるだけ質の高いものを子どもたちに見せたい」という思いから、ミュージカルの登場人物を演じるキャストは、ダンスや演劇等の舞台経験を有する私の仲間に務めてもらうことにしました。

ミュージカルの題材はAちゃんとの遊びの中にも出てきた「ピーターパン」にしました。このお話の大筋は、ウェンディという女の子が、ネバーランドという夢の国から来たピーターパンと、ネバーランドを冒険するというものです。子どもたちはウェンディと同じ心境でネバーランドを冒険できるのではないかと考え、この作品を選びました。

しかし、話の内容はこのミュージカルのために私が考えました。まず、ウェンディが子どもたちに「ピーターパン」のお話を読み聞かせようとしているところに、ピーターが現れます。そしてピーターはウェンディと子どもたちに金の粉を振り掛け、空の飛び方を教え、みんなで空を飛んでネバーランドへ向かいます。ネバーランドでは、インディアンの村でダンスを見て、人魚の泉ではみんなで踊ることを楽しみます。そして、フック船長とピーターの決闘があり、みんなでピーターを応援します。無事にピーターが勝利を収めた後、みんなで元の世界へ飛んで帰り、ピーターは再びネバーランドへ帰っていくというところで物語が終わります。

劇中の曲にはディズニー映画「ピーターパン」の曲やその他のディズニーの曲、ブロードウェイミュージカル「ピーターパン」の中の曲を抜粋し、使用しました。ミュージカルの各場面に歌やダンスが盛り込まれています。そしてウェンディは普段かかわりがある私が演じ、子どもがよりミュージカルに参加しやすくなることを狙いました。

このミュージカルで一番私が大切にしていたこと

は、「一人ひとりのミュージカルとのかかわりを最大限に尊重する」ということです。そのために、ミュージカルの構成の際にも練習の際にも、常に子ども一人ひとりの動きを予想して取り組んでいました。

脚本等はあらかじめ決めてあるのですが、それはあくまで基盤として用意してあるもので、当日の動きは子どもに合わせるということをキャストも保育者も共通の理解としていました。また子どもの反応にきちんとキャストが応えることができるように、キャストを務める人たちには本番前に実習に入っていただきました。そして保育者は、場面の見通しをもって子どもとその場を楽しめるように、ミュージカルの内容や進行についてのミーティングを丁寧にもち、保育者自身も「この場面では子どもとこうやって参加してみたいな。子どもはどんな反応をするのかな」という期待をもって当日に臨みました。

私自身、当日子どもたちから何が出てくるかというのはとても楽しみでもあり、またちょっとした緊張感もありました。

ミュージカル当日

この日は朝から、「今日は何かが起こる」というワクワク感が学校中にあふれていました。それは、大人側のこの日への期待や思いが生み出したものであったように思います。事前にミュージカルで使う曲を私が子どもたちとトランポリンを跳ぶ際に歌っていたこともあり、朝から「今日はピーターパンやる」と言って歌を歌いながら元気にトランポリンを跳ぶ子もいました。また「あなたは何役なの？」とキャストを務める人、一人ひとりに聞いてまわる子もいました。いつも一日の大半を学外に出かけて過ごす子どもも、ミュージカルの時間までには自分から学校に戻ってきました。このような子どもの姿から、子どもたち一人ひとりがお昼ご飯後のミュージカルに気持ちを向けて過ごしていることがわかりました。

ミュージカルは十二時半から十三時の三十分間、

上演しました。そして、開演五分前には、ミュージカルを上演するホールにミュージカルで流す曲を流していました。準備の整った子どもは、ホールの思い思いの場所に座ったり、曲の中で早速踊ったりしながらミュージカルが始まるのを待ちました。

そして、ミュージカルが始まりました。劇中で一番初めにウェンディとして私が登場すると、それまでざわざわしていた子どもや大人の意識がぐっと私に集まり、場の集中力が一気に高まったことを感じました。子どもたちの方を見ると、みんなの目が期待にあふれていることを感じ、私も身が引き締まる思いがしました。

そしてピーターが登場すると、どこからともなく歓声が上がりました。場の集中が良い意味で和らいだ瞬間でした。ピーターが子どもたちに魔法の粉（金のテープを細かく切ったもの）を掛けると、子どもたちの目がさらに輝きました。そしてピーターの「みんなもおいで、一緒に飛ぼうよ」という誘いに少し照れたり戸惑いながらも、子どもたちは前に出てきました。子どもの気持ちが動いた時、保育者は子どもの身体を支えて一緒に動いたり、気持ちを後押ししたりしました。そしてキャストもまた、子どもに直接語りかけ、子どもの手をすっととって動きました。本当に、みんなでネバーランドへ飛び立つ気持ちになりました。

インディアンのダンスでは、見ていても身体が動きだすようで、思わず前に出てきてキャストにつられて足踏みをする子どももいました。そして人魚のシーンでは大人も子どもも一緒になって、音楽の中、思い思いに踊りました。子どもたち一人ひとりの表情から、身体だけではなく心も踊っていることを感じました。そしてフック船長とピーターの対決の場面では、フック船長に少しドキドキしながら二人の決闘を見守り、ピーターが勝利した時に、一気に緊張が勝利の喜びに変わったことを感じました。

ミュージカルの時間は本当に子どもも大人も夢の国「ネバーランド」で一緒に過ごしたような時間となりました。

ミュージカルが終わった後も、キャストはその場に残り、子ども一人ひとりとの出会いを大事にしました。ミュージカルの時にはドキドキ見ていたフック船長に自分から決闘を挑む子どもも何人もいました。またミュージカルの余韻の中、キャストと踊ることを楽しんだり、おしゃべりを楽しむ子どももいました。

私はミュージカルを通して、この子はこんな場面に心惹かれるんだ、こんなことが好きなんだというように、新たな子どもの姿にも出会うことができました。また子どもたちは私の予想以上に、ミュージカルに各々のあり方で参加し、楽しんでくれました。

ミュージカルを終えて

子どもたちのきらきらした目、普段以上にいきいきとした姿、ホールを満たしたあの一体感と熱気を私は忘れることはないでしょう。子どもも大人も本当にいい顔をしていました。

ミュージカル以降、劇中で歌われた曲は毎日子どもや保育者によって歌われるようになりました。また、自分でミュージカルをやりだす子も出てきました。そんな子どもの姿から、子ども一人ひとりの中に各々のあり方でミュージカルの時間が息づいていることを私は感じました。

演劇は人が非現実を現実の中に表現させる方法として生み出したものです。その力を利用して、あえて日常の保育の中に非現実を持ち込む意義はあるのではないでしょうか？　そこでは子どもも大人も一緒になってその世界を生き、一緒に心を動かす体験ができます。また、子どもの遊びに近いミュージカルという総合芸術が、子どもの表現の幅をさらに広げてくれることもあります。そして何より、現実の中の非現実な時間が日常をさらに活気づけることを、この実践を通して私は感じました。

（お茶の水女子大学大学院生）